

日本音楽学会 2012 年度支部横断企画
「インドを奏でる人々—その音楽受容と変容」
実施報告

小日向英俊 (kobinata_h@raga-tala.org)

2013 年 1 月 19 日 (土)、日本音楽学会 2012 年度支部横断企画として「インドを奏でる人々—その音楽受容と変容」(企画代表者:小日向英俊、於:東京音楽大学 A200 教室、14:00-18:00)を開催した。当日は学会員・一般聴衆を含め、総計約 70 名の参加者を得た。ここに、企画を支えてくださった学会本部、学会員および一般聴衆の方々への感謝の意を表したい。また本企画に協力者として参加された神戸愉樹美(東日本支部)、寺田吉孝(西日本支部)、奏演を提供してくださった奥川康子、神戸愉樹美ヴィオラ・ダ・ガンバ合奏団(YKVC)、向後隆、ジミー宮下(宮下節夫)、およびタブラー伴奏者として参加された逆瀬川健治(以上非会員)の諸氏にも、合わせて感謝の意を表したい。また本企画代表者は、科研(基盤(C))「現代日本における南アジア音楽の受容と変容」(課題番号 21520161、2009-2012 年度)により、わが国における南アジア音楽・舞踊の受容についての調査研究を行ってきた。今回のミニコンサートおよびシンポジウムは、その成果発表の一部として科研費の支援を受けたことも、ここに報告しておく。

今回の支部横断企画で目指したことは、1. 日本人によって南アジア音楽奏演を一般社会へ紹介する、2. 実践者が体験した南アジア音楽の受容過程・変容過程を共有する、3. 音楽研究者とこれらの実践者の出会う場所を設定する、4. 日本で進展しつつある音楽多様性を動的に捉える方策を音楽研究者とともに考察する、の大きく 4 点であった。

本企画の背後にある問題意識を以下に述べておく。従来、音楽人類学やいわゆる民族音楽学では、研究対象文化のネイティブな担い手によるオーセンティックな奏演を主な研究対象としてきた。南アジア音楽研究の場合であれば、インド人のような南アジアネイティブの人たちが奏演するものが研究対象となってきた。こうした研究対象の捉え方には一定の妥当性と有効性があるし、これからもそうした研究を継続することは当然である。しかし、近年の政治経済状況下の文化のあり方を考慮すると、これだけでは現代の音楽文化の実態を捉えきれない。グローバリズムにより、ヒト、モノ、カネ、情報が国境を始めとするあらゆる境界を易々と越境し、土地とロカリティに結びついていた音楽文化が、大きく流動し始めているのだ。インド音楽は南アジア(インド)の音楽であり、南アジアの人々が所有する固有の「民族音楽」だとの言説の有効性が低くなりつつある、と言い替えてもよい。南アジア音楽が世界の人々に共有される存在になりつつあると言えるかもしれない。植民地経営、近代科学、政治社会制度の伝播を通じて世界中で受容された西欧の音楽文化の受容様式とは異なる現象として、南アジア音楽の日本における事例が、21 世紀以降の世界の音楽文化を考察するための一つのモデルを提供する可能性がある。

今や、南アジア音楽を奏演する異文化の人々が、米国や欧州諸国、日本を含む先進国に見られるし、その他地球上の様々な場所にも伝播しつつある。南アジア系移民やコミュニティをほとんど持たない日本において南アジア音楽に興味を持ち、奏演を継続する人々や聴取する人々が増えつつある現象は、世界でもユニークなものかもしれない。またその奏演は、オーセンティックな伝統様式だけではなく、日本に存在する音楽多様性の中で相互に影響を与え合い、変容が進んでいることも考察しなければならない。

次に、プログラム内容を報告したい*。第1部ミニコンサートでは、インド音楽の舞踊と器楽演奏を、伝統様式とハイブリッド様式(変容した様式)をそれぞれの奏演者に披露していただいた。ステージ1の南インド古典舞踊バラタナーティヤム(奥川)では、20年以上のキャリアを持つ演者が、伝統的レパートリー2曲に続き、変容様式として記・紀に見られる神、木花開耶姫の物語を南インドのコレオグラフィで踊る《コノハナサクヤ姫》を演じた。日本的題材を取り上げた奥川の《賽の河原-地藏菩薩》や《般若心経》などのシリーズの延長にある作品である。インド舞踊が表現するヒンドゥーの神々の世界を日本のものに置き換えることで、日本人に適合させる試みである。ステージ2のエスラジ演奏(向後)では、インドでもどちらかというとマイナーな楽器の伝統的演奏に続き、これを応用した電子音楽をCDで紹介した。向後は作曲家として、民族楽器と電子音楽の融合を行っている。ステージ3のシタール演奏(小日向+YKVC)では、北インド伝統様式に続き、アメリカ人作曲家によるヴィオラ・ダ・ガンバのコンサートとシタール用楽曲などの抜粋版を紹介した。南アジア系音楽とその他の音楽ジャンルが交わる場では即興的セッションが多く試みられるが、ここで紹介した「鷹ヶ峯」は、作曲家の労作を経たものの事例であった。最後のステージ4では、やはり長いキャリアに支えられたサントゥール演奏(宮下)を紹介した。また、後半では宮下が参加するインド・中東の楽器を入れた演奏グループMakyoの演奏をCDとステージ写真で紹介した。いわゆる民族音楽系楽器とシンセサイザーなどを含めた、彼らの言によるトライバル・ダブ・サウンドを奏でる即興演奏主体のライブ演奏の収録版であった。これら4ステージ構成により提示した伝統様式とハイブリッドな応用様式から、南アジア音楽と日本人の関わり的一端を紹介できたかと思う。

第二部シンポジウム「インドを奏でる人々-その音楽受容と変容」では、民族音楽学の寺田、ヴィオラ・ダ・ガンバ演奏者かつ研究者の神戸と、第一部の主奏者たちをパネリストに迎え、小日向が司会も兼ねた。神戸には、日本における西洋古楽の受容、寺田には世界における南アジア音楽の受容についての発表を依頼した。また小日向は、日本における南アジア音楽受容を史的観点から概観し、受容モデルを示した。各演奏者には、司会者の質問への回答という形式で発表していただいた。それぞれの南アジア音楽との関わり、ハイブリッド様式への取り組みの考え方について質問した。

集会終了後には、受容を巡る研究者の報告を聞いて自らの行っていることを相対化できた、との意見が演奏者たちから寄せられた。また研究者からは、これらの実

践者へのインタビューをしてみたいとの意見が寄せられた。シンポジウムでは数が減ったとはいえ、一般参加者の反応もおおむね「おもしろかった」「興味深かった」とのようだった。パネリストの意見のなかでは、ヒンドゥーの神々を信仰しているわけではないので、自分の納得できる題材を探したい旨の奥川の発言は、筆者に強い印象として残った。これは神戸の報告に言う、日本人は（異文化音楽の）存在理由を受容しない旨の発言に呼応するものであろう。またこうした受容により変容した姿が、逆に南アジアの音楽文化に影響を与える可能性も考慮しなくてはならない。寺田が報告した「文化の還流」現象を考慮すれば、こうしたダイナミックな音楽文化の流れを、世界規模の協力体制のなかで研究する必要性も改めて認識しなければと思う。

本シンポジウムでは参加者の数に比し、総時間（2時間弱）が短く、参加者相互や聴衆との意見交換が十分に行えなかったことは、反省点として残った。また、研究者相互の意見交換に十全な時間が割けなかったことも大きな反省点であった。また、企画段階で構想した南アジアネイティブの奏演者の演奏を含めることも時間と予算の都合からかなわなかった。これらの責は、ひとえに企画代表者にある。

企画者としては、日本における異文化音楽受容の総体を総合的に捉える研究プロジェクトを提案したい。南アジア音楽ばかりではなく、東南アジアからはインドネシア音楽、タイ音楽など、東アジアからは中国音楽や韓国音楽、西アジアからはアラブ音楽、サハラ以南の特に西アフリカの音楽、また異文化受容としては長い歴史をもつ中南米音楽などが日本人に受容されている。これらの実践者やその音楽受容を体系的に考察し、日本における変容の様態を研究するのである。このような受容過程が今後どの程度進展するのかわからないのか、その次ぎに到来するであろう統合過程がどのような姿になるのかなどは、学術的にも興味ある点である。一方、こうした音楽多様性から積極的に新たな音楽を創造していく行為も促進したいところである。このように考えると、音楽多様性の認識を学校教育や社会教育の中で深めていくことの必要性を、改めて感じたところである。

* 当日配付したプログラム・資料は以下よりダウンロードできる：
<http://bit.ly/20130119indo>